

NEW JAPAN
*P*HILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2023/2024シーズン



2023

10

October

11

November

2023/2024 シーズン
新日本フィルハーモニー交響楽団 10, 11月演奏会

Contents

すみだクラシックへの扉 #18 小室敬幸	1
トリフォニーホール・シリーズ/サントリーホール・シリーズ #652 相場ひろ	7
すみだクラシックへの扉 #19 石川亮子	13
楽員ストーリーズ ⑳ 金子典樹 (ホルン)	19
NJP from Inside	20
NJP 1月、2月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	23
2023/2024シーズン 定期演奏会プログラム	24
お客様からの声	27
室内楽シリーズ	29
「パトローネージュ・システム」のご案内	34

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

CCC

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業/団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

〈コンサートの感想をお寄せください〉

演奏会終了後1週間以内にご回答いただいた方の中から、抽選で10名様に新日本フィルオリジナルグッズをプレゼント!

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。プレゼントの当選者にはメールにてご連絡させていただきます。
culture@njp.or.jpからのメールが受信できるようご設定をお願い致します。

<https://forms.gle/nzYkJLAuZG1tfYY36>

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。

〈ご来場のお客様へのお願い〉



10.20 [金] 21 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第18回
2023年10月20日(金)14時00分 すみだトリフォニーホール
10月21日(土)14時00分 すみだトリフォニーホール

●メンデルスゾーン (1809-47)

序曲「フィンガルの洞窟」op. 26

Felix Mendelssohn Bartholdy: "Die Hebriden" (Fingal's Cave), op. 26

約10分

●シューベルト (1797-1828)

交響曲第7番 口短調 D. 759「未完成」

Franz Schubert: Symphony No.7 in B minor, D. 759

約30分

- I. Allegro moderato
- II. Andante con moto

—— 休憩20分 ——

●ベートーヴェン (1770-1827)

交響曲第6番 へ長調 op. 68「田園」

Ludwig van Beethoven: Symphony No. 6 in F major, op. 68 "Pastorale"

約45分

- I. 田舎に到着の際、人間にわき起こる心地よい、陽気な気分
Angenehme, heitere Empfindungen, welche bei der Ankunft auf dem Lande im Menschen erwecken:
Allegro ma non troppo
- II. 小川沿いの情景
Szene am Bach: Andante molto moto
- III. 田舎の人々の楽しい集い
Lustiges Zusammensein der Landleute: Allegro
- IV. 雷鳴・嵐
Donner. Sturm: Allegro
- V. 羊飼いの歌 — 嵐の後の、快い、神への感謝と結びついた感情
Hirtengesang. Wohltätige, mit Dank an die Gottheit verbundene Gefühle nach dem Sturm:
Allegretto

【指揮】鈴木秀美

Hidemi Suzuki, Conductor

【コンサートマスター】西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

- 主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
- 共催：すみだトリフォニーホール
- 特別協賛：オリックス株式会社/公益財団法人オリックス宮内財団
- 助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))
独立行政法人日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団



Profile



©K.Miura

鈴木秀美 [指揮]

Hidemi Suzuki, Conductor

神戸生まれ。20世紀最後の約16年間オランダ・ベルギーを中心に過ごす。「18世紀オーケストラ」、「ラ・プティット・バンド」等のメンバーを務め、「バッハ・コレギウム・ジャパン」では創立以来2014年まで通奏低音奏者としてバッハの全宗教作品を演奏・録音した。ブリュッセル王立音楽院バロック・チェロ科初代教授として招聘され、2000年に帰国するまで務めた。1995年と2005年にオリジナル楽器による『バッハ／無伴奏チェロ組曲全曲』を録音。バロックのソナタ、ポツケリーニのソナタや室内楽、ベートーヴェンとメンデルスゾーンの世界全集ほか録音多数。

2001年に古典派を中心としたレパートリーをオリジナル楽器で演奏する「オーケストラ・リベラ・クラシカ」(OLC)を結成。ハイドンを中心とした活動を開始し、自身のレーベル「アルテ・デラルコ」からOLC、室内楽、ソロ等の録音を多数リリース。

指揮者、チェリストとしてオランダ、ポーランド、ベトナム、オーストラリア、韓国等に招かれた他、日本各地のオーケストラに客演。国内外のコンクールの審査員も務める。

二期会「ニューウェーブ」企画ではヘンデルのオペラを指揮。神戸市室内管弦楽団音楽監督、山形交響楽団首席客演指揮者。東京音楽大学チェロ科客員教授、東京藝術大学古楽科非常勤講師。「雑司谷拝鈍亭」の終身楽長並びに楽(らく)遊会弦楽四重奏団メンバー。日本ベートーヴェンクライス副代表理事。

著書に『『古楽器』よ、さらば!』(音楽之友社)、『ガット・カフェ』『無伴奏チェロ組曲』(東京書籍)、『通奏低音弾きの言葉では、』(アルテスパブリッシング)。国内外のコンクール優勝の他、第37回サントリー音楽賞、第10回齋藤秀雄メモリアル基金賞受賞、文化庁芸術作品賞、芸術祭優秀賞、レコード・アカデミー賞(協奏曲部門)、ディアパゾン金賞(フランス)等を受賞。神戸新聞に「演奏家のレシビ」を好評連載中。

Program Notes ●小室敬幸 [音楽ライター]

ビギナーでも楽しみやすい「名曲コンサート」のことを「プロムナード・コンサート」と呼んだりするが、その由来をさかのぼると19世紀のヨーロッパにおける野外演奏会に辿り着く。椅子やテーブルが置かれていたりしても、立って聴く聴衆も多くて自由に歩き回ることが出来た。特にロンドンにおいてこうした演奏会を「(フランス語で「散歩」を意味する)プロムナード・コンサートと呼んだのである。演目は、当時人気の聴きやすい楽曲を並べることが多かった。英国を代表する夏の音楽祭BBCプロムスも、19世紀末に始まったプロムナード・コンサートを前身としているし、そもそも「プロムス」という名も「プロムナード」を略したものなのだ。

■メンデルスゾーン：序曲「フィンガルの洞窟」op. 26

スコットランドの情景から ▶ 19世紀には「演奏会用序曲」とも呼ばれる、後続の音楽をもたない、単独で存在する序曲が数多く書かれるようになった。フェリックス・メンデルスゾーン(1809~47)が1829年にスコットランドを訪れた際の経験から1830年に作曲され、1832年に改訂された本作は、その代表格といえる。フィンガルの洞窟というのは、ヘブリディーズ諸島にあるスタファ島の洞窟のことで、スコットランドの詩人ジェイムズ・マクファーソンの叙事詩「フィンガル」(主人公の名もフィンガル)によって、通称フィンガルの洞窟と呼ばれるようになった。人工物と見紛うような石柱が並びたつ荘厳かつ神秘的な風景は、若きメンデルスゾーンに創作のインスピレーションを与えた。

音楽の特徴 ▶ 単一楽章のソナタ形式になっており、波の揺れを思わせる第1主題は冒頭から何度となく繰り返される。風光明媚な風景を連想させる第2主題は長調で、チェロとファゴットが奏し始める。この2つの旋律を軸にして、洞窟までの道ゆき、嵐のなか船酔いに悩まされた経験などが描かれているのだろう。

[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

■シューベルト：交響曲第7番 口短調 D. 759 [未完成]

“未完成”をめぐって ▶ ドイツとオーストリアの交響曲は全4楽章が基本形。だから第2楽章までしか完成していない本作は「未完成」と見なされてきた。フランツ・シューベルト(1797~1828)が第3楽章途中で作曲をやめてしまった理

由がはっきりしないため、これまで様々な憶測を呼んできた。

だが、この第2楽章まででシューベルトが作品に込めた思いは、完成しているのではないかという説もある。例えばシューベルト研究者の堀朋平氏は著書「〈フランツ・シューベルト〉の誕生：喪失と再生のオデュッセイ」において、シューベルトの歌曲作品と関連付けながらこの交響曲を分析。両思いの相手がいない「喪失」の第1楽章、そこからの救済である「再生」の第2楽章という完結した構成にあるのだと解説する。もう少し、分かりやすく噛み砕いてみよう。

第1楽章 ソナタ形式。冒頭、低音の弦楽器によって提示される旋律が、いわば「喪失」の象徴である。その後続く、木管楽器が歌う暗い響きの第1主題からは、ひとりで恋に憂うシューベルトが連想される。弦楽器が主導して最初は明るく始まる第2主題からは、実際に行動しながら一喜一憂する姿を連想してもいいかもしれない。ところが展開部と呼ばれる部分になると、この2つの旋律はあまり顔を出さず、喪失を象徴する旋律ばかりが登場していく。

第2楽章 展開部のないソナタ形式。第1主題の始まりとなる冒頭のホルンが優しく響くが、上行する3音は前楽章の「喪失」も想起させる……。自然を散策するような音楽のなかで、時間をかけて喪失と向き合って「再生」へ歩んでいくが、弦楽器の揺らぐ伴奏に乗って奏でられる第2主題は悲しげに始まり、喪失の辛い記憶がフラッシュバックする。

[楽器編成]フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部。

■ ベートーヴェン：交響曲第6番 へ長調 op. 68 「田園」

「標題」という熟語は「タイトル」という意味なのだが、音楽用語「標題音楽 Programmusik」は単にタイトル(クラシック音楽の場合は特に副題)を持っているという意味にはならない。1855年にフランツ・リストが提示した概念で、タイトルが序文のような役割を果たし、作品に込められた詩的な観念を伝える作品を指すという。だから、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)の交響曲でいえば「英雄」や「運命」は作曲家自身が付けたものではないから標題音楽とはいえないわけだ。ベートーヴェンの交響曲のなかで唯一、該当するのは初版楽譜の表紙にも「PASTORALE」と印刷された、この第6番だけである。

情景と人間の感情を反映 ▶ 田園が定訳となっているpastoraleは、イタリア語由来で「羊飼いの」という意味の形容詞。そこから転じて「牧歌(=羊飼いの歌)的」や、羊飼いが暮らす「田園(の)」、更には集団を束ねる「聖職者の」という意味を持つようになった。ただしベートーヴェン自身によれば、自然そのものを描くというよりもその環境に置かれた人物の感情を音楽で表現したのだという。このように交響曲に情景描写を持ち込んで各楽章に標題を付けるというアイデアはその後、フランスのベルリオーズに影響を与えて、「幻想交響曲」などが生まれ、更にはリストが創始した交響詩へと繋がっていく。それゆえ、この「田園」交響曲が歴史的先駆と評価されているのだ。

曲の構成と音楽の特徴 ▶ **第1楽章**「田舎に到着の際、人間にわき起こる心地よい、陽気な気分」ソナタ形式。日々散歩をかかさず、頻繁に田舎へと旅行していたベートーヴェンによる自然賛歌だ。冒頭の第1主題、揺らぐ弦楽の響きをとまなう第2主題……様々な旋律が繰り返されるが、展開部ではまるで紅葉のように少しずつ色味が変わってゆく。

第2楽章「小川沿いの情景」ソナタ形式。第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロが穏やかな川の流れを描き、そこに木管楽器による鳥の鳴き声が重なってくる。主旋律は、情景の美しさに心ほだされる人間の心なのかもしれない。

第3楽章「田舎の人々の楽しい集い」スケルツォ。自然ではなく人間に焦点を合わせた楽章で、野外で人々が交流し、愉快地に踊る様子を描いている。ホルンの高い音は、笑い声や歓喜の雄叫びにも聴こえる。

第4楽章「雷鳴・嵐」実質的な第5楽章への前奏曲だ。災害であると同時に、収穫の秋をもたらしてくれる嵐を、ピッコロやトロンボーン、ティンパニを編成に加えて劇的に描いていく。

第5楽章「羊飼いの歌—嵐の後の、快い、神への感謝と結びついた感情」ロンド・ソナタ形式。自然と共に生きる羊飼いによる歌で、豊かな自然を生み出した創造主たる神を讃える。キリスト教では小羊が人間のメタファー(隠喩)であることは有名だが、そこから羊飼いが“神”を象徴する可能性があることは、さほど知られていないだろう。

[楽器編成]フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ、弦楽5部。

曲の構成と音楽の特徴
(喪失を再生をテーマに)

作曲家による標題付き ▶

「あした」は、ナニイロ？

鹿島のしごと。

それは「あした」をつくること。

人と自然と向き合って、
よりよい毎日をつないでいくこと。

暮らしを描く、ものづくり。
無限の創造力で、彩り豊かな未来へ。

100年をつくる会社
鹿島

Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2023-2024 Season

#652

10.28 [土]

トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第652回定期演奏会
2023年10月28日(土)14時00分
すみだトリフォニーホール

10.30 [月]

サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第652回定期演奏会
2023年10月30日(月)19時00分
サントリーホール

●ハイドン (1732-1809)

交響曲第44番 ホ短調 Hob.I:44「悲しみ」

約25分

Joseph Haydn: Symphony No. 44 in E minor, Hob. I:44 "Trauersinfonie"

- I. Allegro con brio
- II. Menuetto: Allegretto
- III. Adagio
- IV. Finale: Presto

—— 休憩20分 ——

●ブルックナー (1824-96)

交響曲第4番 変ホ長調 WAB104「ロマンティック」(ノヴァーク版 1878/80稿)

約70分

Anton Bruckner: Symphony No. 4 in E-flat major, WAB 104 "Romantische"
(Leopold Nowak, 1878/80 version)

- I. 動きをもって、速すぎず
Bewegt, nicht zu schnell
- II. アンダンテ・クワジ・アレグレット
Andante quasi allegretto
- III. スケルツォ: 動きをもって (トリオ: 速すぎず。決して引きずらないように)
Scherzo: Bewegt (Trio: Nicht zu schnell. Kainesfalls schleppend)
- IV. フィナーレ: 動きをもって、しかし速すぎることなく
Finale: Bewegt, doch nicht zu schnell

[指揮] 佐渡 裕

Yutaka Sado, Conductor

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙 / 伝田正秀

Munsu Choi and Masahide Denda, Concertmaster

- 主催: 公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
- 共催: すみだトリフォニーホール [10/28公演]
- 特別協賛: オリックス株式会社 / 公益財団法人オリックス宮内財団
- 助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))
独立行政法人日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団



Profile



© Peter Rigaud c/o Shotview Artists

佐渡 裕 [指揮]

Yutaka Sado, Conductor

京都市立芸術大学卒業。1987年アメリカのタンゲルウッド音楽祭に参加。その後、故レナード・バーンスタイン、小澤征爾らに師事。89年新進指揮者の登竜門として権威あるブザンソン国際指揮者コンクールで優勝。95年レナード・バーンスタイン・エルサレム国際指揮者コンクールで優勝し、「レナード・バーンスタイン桂冠指揮者」の称号を授与される。

これまでパリ管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団、ケルンWDR交響楽団、バイエルン国立歌劇場管弦楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ロンドン交響楽団等欧州の一流オーケストラに多数客演を重ねている。またエクサンプロヴァンス音楽祭の『椿姫』（パリ管弦楽団）、オランジュ音楽祭のプッチーニ『蝶々夫人』（スイス・ロマン管弦楽団）、トリノ王立歌劇場では『ピーター・グライムズ』、『カルメン』、『フィガロの結婚』等海外でのオペラ公演も多数指揮。

現在はオーストリアで110年以上の歴史を持つトーンクンストラ管弦楽団音楽監督を務め欧州の拠点をウィーンに置いて活動している。国内では兵庫県立芸術文化センター芸術監督、シエナ・ウインド・オーケストラ首席指揮者、サントリー「1万人の第九」総監督。

CDリリースは多数あり、『チャイコフスキー：ピアノ協奏曲第1番（BBCフィルハーモニック/ピアノ辻井伸行）』、『佐渡裕 ベルリン・フィル・デビューLIVE』、『ベートーヴェン「運命」、シューベルト「未完成」』（ベルリン・ドイツ交響楽団）などの海外楽団とのCD、シエナ・ウインド・オーケストラを指揮した『プラスの祭典』シリーズなどが好評を得ている。最新盤はトーンクンストラ管弦楽団を指揮した18枚目のCD『マーラー：交響曲第3番 二短調』を23年4月にリリース。著書に『僕はいかにして指揮者になったのか』（新潮文庫）、『棒を振る人生～指揮者は時間を彫刻する～』（PHP新書）、絵本『はじめてのオーケストラ』（小学館）等がある。2023年4月より新日本フィルハーモニー交響楽団第5代音楽監督に就任。

オフィシャルファンサイト：<http://yutaka-sado.meetsfan.jp>

Program Notes ●相場ひろ [音楽評論]

筆者が小・中学生だった頃、音楽の教科書や副読本にはヨーゼフ・ハイドンの逸話として、「告別交響曲」にまつわる話が紹介されていたものだった。1772年のこと、雇い主のニコラウス・エステルハージ侯爵が通常のシーズンを大幅に越えてもおかかえの楽団に休暇を与えず、楽士たちが疲弊してしまった。彼らを思いやった楽長のハイドンは一計を案じて「告別交響曲」を書く。演奏の途中に楽士がひとりずつ舞台を去り、最後はたったふたりになって終わる、という趣向にピンときた侯爵は「彼らが去るなら、私も去らねばなるまい」と言って楽士たちに休暇を言い渡したという。

じっさい「告別交響曲」の名で呼ばれるハイドンの交響曲第45番は、エピソードそのものに劣らぬくらいユニークな作品である。当時としては珍しい嬰へ短調という調性をとり、第4楽章の途中まではふつうの交響曲の体裁をとりながら、突如イ長調の緩やかなエピローグが始まり、その中で演奏者が次から次へと、それぞれ短いソロを奏してから退席していくのだ。実験的と言うべきか奇想と言うべきか、こんにち実演で接しても特別な印象を与える一曲と思う。

忘れてはならないのは、この第45番が突出した例ではなく、当時のハイドンの交響曲はどれもが尖鋭さを誇るものだったことである。1760年代後半から1770年にかけて書かれた約20曲の交響曲は、理性的なものよりも感情的なものを重んじる当時の文学運動にちなんで「シュトゥルム・ウント・ドラング（疾風怒濤）」期の作品群と呼ばれる。さまざまに実験的な試みを織り込み、かつ劇的・激情的な表現が多用されるこうしたスタイルは、通人のエステルハージ侯爵には楽しめこそすれ、時代のはるか先を行くものであった。交響曲の「父」であったハイドンは、同時にジャンルの革新者でもあったのだ。

そのことに思いをはせると、ハイドンとブルックナーの作品を並べるこのようなプログラムは非常に意義深いものに思える。交響曲をひとつの完成されたジャンルに高めた一方で、そこからの進化をも視野に入れていたハイドン、交響曲のもっとも純度の高い形態を保持しつつ、その頂点のひとつを極めたブルックナー、そのふたりを並べることで、このジャンルが辿った数ある道程のひとつを、明瞭に見渡すことができはしまいか。

■ ハイドン：交響曲第44番 ホ短調 Hob. I-44「悲しみ」

実験的作風、劇的な表現 ▶

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)は1761年に、ハンガリーの有力な貴族であり、たいへんな音楽愛好家一族でもあったエステルハージ家に仕える楽団における副楽長の座を得た。約30年間に及ぶエステルハージ家での活動は数多くの傑作を世に送り出すことになる中で、特に楽長に昇進した1766年前後から70年代にかけては、実験的な作風と強い表現意欲を併せ持った数々の作品が書かれることとなった。長調作品が偏愛された当時の流行に逆らうかのように短調作品の占める割合が高く、また古典派期としては古風なフーガなどの対位法的な書法が多用されることに加えて、振幅の広く、激しい表現を盛り込んだこの時期は、当時の文学運動「シュトゥルム・ウント・ドラング」に呼応するものともみなされる。こんにちこうした文学運動との比較は適切でないと思われることが多いけれども、この時期の交響曲群が、際立って革新的な性格を備えていたことは疑いない。

「悲しみ」の愛称はどこから ▶

1772年頃に作曲された交響曲第44番ホ短調は、当時ほとんど作例のなかったホ短調という特殊な調性を用いている点がまずユニークである。ハイドン自身もこの曲をことのほか愛し、「私の葬儀の時にはこの曲の第3楽章を演奏してほしい」と言ったとされる。その言葉を受けて、1809年9月にベルリンで行われた追悼記念行事ではこの第3楽章が演奏された。このことが由来となって、第44番はしばしば「悲しみ」「追悼」「葬送」といった愛称で呼ばれる。

曲の構成と音楽の特徴 ▶

第1楽章 アレグロ・コン・プリオ。ソナタ形式で、第1主題は強奏と第1ヴァイオリンの対話として提示される。長大な経過部の後、第2主題は平行長調で力強くあらわれる。緊迫した展開部をはじめ、対位法的な書法と強弱の極端な対比が、劇的な音楽を築き上げている。

第2楽章 メヌエット：アレグレット。オクターヴのカノンで進行する主部はバロック音楽風の古風な趣を持つ。トリオはより歌謡的で、柔軟な歌が聴かれる。

第3楽章 アダージョ。再現部の簡略化されたソナタ形式による。弱音器を付けたヴァイオリンを主体に、繊細な歌が歌い継がれる。

第4楽章 フィナーレ：プレスト。ソナタ形式であるが、冒頭にあらわれる第1主題による単一主題的構成はハイドンが終楽章に好んで用いる手法である。再現部以降は短縮され、強い緊張や疾走感とともに幕を閉じる。

[楽器編成] オーボエ2、ファゴット、ホルン2、弦楽5部。

■ ブルックナー：交響曲第4番 変ホ長調 WAB104「ロマンティック」

作曲、改稿の経緯 ▶

1873年末に交響曲第3番ニ短調(第1稿)を書き上げたアントン・ブルックナー(1824~96)は、翌年1月早々から新しい交響曲の作曲にとりかかった。11月までの期間を費やして完成された全曲の楽譜は、演奏機会に恵まれることなく放置される。しかし、1875年から書き始めていた交響曲第5番変ロ長調が1878年に完成すると、彼はただちに交響曲第4番の改稿に取り組み始めた。これは前々年からあちこちで第4番の上演について話が持ち上がるたびに、改稿への意欲にとらわれた結果らしい。ブルックナーは第1、2、4楽章を大きく書き直した上で、第3楽章スケルツォについてはまったく新しいものを書き下ろしたのだった。さらに彼は1880年に第4楽章をもう一度改稿し、また若干の手直しを加えた上で、ついに完成にこぎつけた。この楽譜は1881年2月20日にウィーンで初演され、ブルックナーの交響曲演奏としては初めての成功を収めることとなった。

曲の構成と音楽の特徴 ▶

第1楽章 「動きをもって、速すぎず」。3つの主題を持つソナタ形式。第1主題は「ブルックナー開始」とも言われる弦楽器のトレモロの響きの上でホルンによって提示される。続く第2主題はヴァイオリンのオブリガートを伴うヴィオラによって歌い出され、第3主題は金管楽器によって力強く提示される。充実した展開部の後、再現部は大きな高揚を描いて楽章を締めくくる。

第2楽章 アンダンテ・クワジ・アレグレット。やはりソナタ形式により、チェロが第1主題、ヴィオラが第2主題を奏した後、展開部は新しい対旋律を導入して豊かな響きが繰り広げられる。再現部は短縮されているが、その後に第2展開部にもあたる長大なコーダが登場する。

第3楽章 スケルツォ。「動きをもって」。狩猟の合図を送るホルンを模した主題に始まるスケルツォ主部と、田園的な性格を持つトリオが鮮やかな対照を成す。

第4楽章 フィナーレ。「動きをもって、しかし速すぎることなく」。長大な序奏を持つソナタ形式による終楽章は、冒頭で第3楽章のホルンの音形が聴かれるのをはじめとして、先行する3楽章の主題を扱い、全体に強固な統一性をもたらしつつ、壮麗なクライマックスを築き上げる。

[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部。



SHARE LOUNGE

発想が生まれ、シェアする場所

シェアラウンジは、ラウンジの居心地と本による提案、オフィスの機能性を兼ね備え、訪れた人に「新しい発想を提供する場所」です。

新たな発想は心を躍らせ、生活を明るくし、世界をほんの少し良い場所にしてくれるもの。働く人だけでなく、お子さまや学生、主婦の方など、すべての人たちが日々の暮らしの中で、発想を必要としています。

ここに集まる多様な人々が風景をつくり、そこにいるだけで刺激がもらえたり、本からインスピレーションを得ることもできる。ある時は居心地の良いカフェやバーとして、またある時は体験を促すイベントスペースとして。

新たな発想を生む、たくさんの仕掛けが詰まった空間です。

SHARE LOUNGE by Culture Convenience Club

[SHARE LOUNGE]

代官山 蔦屋書店／六本木／丸の内／渋谷スクランブルスクエアほか、全国に順次拡大中。最新の店舗一覧はアプリをご覧ください。



SHARE LOUNGE
公式アプリ

App
Store



Google
Play



SUMIDA
TOBIRA of classic
2023-2024 Season
#19

11.10 [金] 11 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第19回
2023年11月10日(金)14時00分 すみだトリフォニーホール
11月11日(土)14時00分 すみだトリフォニーホール

● ロッシーニ (1792-1868)

歌劇『アルジェのイタリア女』序曲

Gioachino Rossini: Overture to "L'Italiana in Algeri"

約10分

● ヴェルディ (1813-1901)

歌劇『運命の力』序曲

Giuseppe Verdi: Overture to "La forza del destino"

約10分

● ヴィエニャフスキ (1835-80)

ヴァイオリン協奏曲第1番 嬰へ短調 op.14 *

Henryk Wieniawski: Violin Concerto No.1 in F-sharp minor, op.14 *

約25分

I. Allegro moderato

II. Preghiera: Larghetto

III. Rondo: Allegro giocoso

—— 休憩20分 ——

● ワーグナー (1813-83)

楽劇『トリスタンとイゾルデ』より「前奏曲と愛の死」

Richard Wagner: 'Prelude - Liebestod' from "Tristan und Isolde"

約15分

● ビゼー (1838-75)

「カルメン組曲」第1番、第2番より

Georges Bizet: "Carmen Suite" No.1, No.2, excerpts

約15分

Suite No.1 前奏曲 Prélude

アラゴネーズ Aragonaise

間奏曲 Intermezzo

セグディーリャ Séguedille

Suite No.2 ジブシーの踊り Danse Bohème

[指揮] ジャン=クリストフ・スピノジ

Jean-Christophe Spinosi, Conductor

[ヴァイオリン] HIMARI *

HIMARI, Violin *

[コンサートマスター] 西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))

独立行政法人日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。



すみだ
フィルハーモニー

Profile



ジャン=クリストフ・スピノジ [指揮]

Jean-Christophe Spinosi, Conductor

フランスのコルシカ生まれ。クラシック音楽における「アンファン・テリブル」とも言われる。また、彼は並はずれたリズム感と身体能力を持ち合わせた、音楽家=振付師であり、従来の音楽ジャンルを超え、新たな聴衆へ働きかけ続けている。

ヴァイオリニストと指揮者、ふたつの顔を持つスピノジは、1991年「アンサンブル・マテウス」を創設し、仏ブルターニュ地方において唯一と言える国際的な名声を誇るアンサンブルに成長させた。アンサンブルとともに、パリ・シャトレ座をはじめヨーロッパ各地で新しいプロダクションに携わっている。特に古楽の研究に情熱を注いでおり、2005年にはヴィヴァルディの未録音作品シリーズをリリースし、話題を呼んだ。

ウィーン・フィル、ベルリン・フィルをはじめ、世界中のオーケストラから頻りに招かれており、日本ではこれまでに新日本フィル、大阪フィルに客演。新日本フィルとは2010年に初登場以来、共演を重ねている。カーネギーホールからアジアまで、その活躍の場は幅広い。



©Hitoshi Iwakiri

HIMARI [ヴァイオリン] HIMARI, Violin

2011年生まれ、12歳。2022年難関名門校・カーティス音楽院に最年少で合格。アメリカと日本を中心に活動。

「第15回リピンスキ・ヴィエニャフスキ国際ヴァイオリンコンクール」にて史上最年少、特賞グランプリ(第1位を上回る)を受賞。グリェムイオー国際、ポストッキーニ国際、シェルクンチク国際コンクールなど出場したコンクールすべてで1位。ザルツブルク音楽祭に最年少で出演。ロシア、スイス、オーストリア、イタリア、ベルギー、ウクライナ、アメリカ、カナダのコンサートに出演。

これまでV. スピヴァコフ、N. ジャジュラ、I. ストルボフ、K. ウィルソン、小林研一郎、大友直人、広上淳一、秋山和慶、原田慶太楼、梅田俊明、角田鋼亮、下野竜也、モスクワ・フィル、ロシア・ナショナル管、キエフ国立フィル、N響、読響、新日本フィル、東響、日本フィル等と共演。

原田幸一郎、小栗まち絵、アイダ・カヴァフィアの各氏に師事。江副記念リクルート財団第52回奨学生。

使用楽器は1717年製ストラディヴァリウス《Hamma》を前澤友作氏より、弓は「宗次コレクション」より貸与されている。

オフィシャルホームページ himari-info.com

オフィシャルインスタグラム

<https://www.instagram.com/himariviolin.official/>

Program Notes ●石川亮子 [音楽学]

いつか白馬に乗った王子様が迎えに来てくれる。ヨーロッパの物語(ロマンス)の典型のひとつから生まれたこの言葉(厳密に訳せば「白馬に乗った騎士」)は、19世紀ロマン派の時代精神を象徴している。誰しもの胸にある手の届かないものへの憧れ——。シューマンは(おそらくブラームスも)クララへの思いを音楽にし、ショパンはパリでマズルカやポロネーズを書き、リストは超絶技巧でファンたちを熱狂させた。オペラは異国であるか古代や中世といった過去であるか、つまりここではないどこかを描き出す。ロマン派の音楽が時に激しく、時に切なく、何よりも美しいのは、そのためなのかも知れない。

■ ロッシーニ：歌劇『アルジェのイタリア女』序曲

大人気の波に乗った
21歳の傑作

ペーザロに生まれ、自他ともに認めるモーツァルトの生まれ変わりとして、19世紀初頭のイタリア・オペラを牽引したジョアキーノ・ロッシーニ(1792~1868)。実のところ、ロッシーニは37歳でオペラから引退している。オペラ作曲家としての創作期間は約20年しかない。オペラ・ブッフアの名作、『セビリヤの理髪師』に先立つこと3年前。『アルジェのイタリア女』は1813年ヴェネツィアで初演され、その評判によって21歳のロッシーニは、国際的な名声を確立することになった。

熱狂的なエンディング

妻に飽きたアルジェリアの太守。そこに海賊によって連れてこられたイザベッラは、この地で離ればなれになっていた恋人リンドーロと再会。こうして繰り広げられる脱出劇は、モーツァルトの『後宮からの逃走』を思い出させる。序曲はゆるやかな序奏から始まり、快活な主部は「ロッシーニ・クレッシェンド」(短いフレーズを繰り返しつつ音量を増していく)で熱狂的に締めくくられる。

■ ヴェルディ：歌劇『運命の力』序曲

ロシアから委嘱された
グランド・オペラ

19世紀後半において、イタリア・オペラの黄金期を築いたジュゼッペ・ヴェルディ(1813~1901)。中期の3つの傑作、『リゴレット』『トロヴァトーレ』『トラヴィアータ』の後、ヴェルディは国外からの依頼によって大作を手がけていった。そのひとつ、『運命の力』は1862年サンクトペテルブルクで初演。その後、1869年ミラノでの上演に際して大幅に改訂された。物語の舞台は18世紀スペインとイタリア。侯爵の娘レオノーラと、その恋人で複雑な出自を持つアルヴァーロ。2人が駆け落ちしようとした時、銃が暴発して侯爵が死亡。レオノーラの兄カルロは復讐に燃える——。

オペラの音楽が
メドレー風に

『運命の力』序曲は、ヴェルディが手がけた最後の序曲として有名で、単

独で演奏される機会もきわめて多い。荘重な3音のユニゾンによって開始。そして弦楽器による、せき立てるようなメロディー（3人が翻弄される「運命」の悲劇を象徴する）を中心として、オペラのなかの複数の音楽がメドレー風に使用されていく。

[楽器編成(上記2曲の最大編成)]フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、ハープ2、弦楽5部。

■ ヴィエニャフスキ：ヴァイオリン協奏曲第1番 嬰へ短調 op.14

ヴァイオリンの魅力を最大限に▶

ヴィルトゥオーゾの時代であった19世紀ロマン派において、パガニーニの後の世代の頂点に位置づけられるヴァイオリニスト兼作曲家が、ヘンリック・ヴィエニャフスキ(1835~80)であった。ポーランド・ルブリン生まれ。8歳にして見事な演奏でパリ音楽院に入学。1860~72年には宮廷奏者としてサンクトペテルブルクに滞在。ヴィエニャフスキの演奏は、フランスの教育とスラヴ人気質が重なり合って形成されていったと説明されるが、その作品もまた、高度な技術の数々を余すところなく披露しつつ独特の色香が漂っている。

曲の構成と音楽の特徴▶

1862年にヴィエニャフスキ自身のヴァイオリンで初演され、代表作のひとつとして知られるヴァイオリン協奏曲第2番。一方で第1番は1853年に初演された、すなわち18歳の年の作品であり、より一層技巧的な協奏曲と言うことができるだろう。曲は3楽章構成。第1楽章は協奏的ソナタ形式により、情熱的な第1主題と抒情的な第2主題があざやかに対比される。第2楽章は「祈り」のタイトルが付けられた間奏曲風の音楽。第3楽章は金管楽器のファンファーレによって開始され、舞曲のリズムに乗せた華麗なる「ロンド」となる。

[楽器編成]ヴァイオリン独奏、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部。

■ ワーグナー：楽劇「トリスタンとイゾルデ」より「前奏曲と愛の死」

愛をテーマに▶

中世。アイルランド女王イゾルデはマルケ王に嫁ぐべく、王の甥である騎士トリスタンとともにコーンウォールに向かう船に乗る。トリスタンとイゾルデは死の薬を飲み干すが、それは愛の薬にすり替えられていた。二人は昼の世界を逃れて、夜の世界で激しく愛し合う。リヒャルト・ワーグナー(1813~83)が「トリスタンとイゾルデ」を創作したのは1857~59年のこと。その背景には、ショーペンハウアーの厭世哲学への傾倒とともに、この時のワーグナーの実生活(パトロンであったスイスの裕福な商人、ヴェーゼンドンクの妻マティルデとの恋愛関係)があったと言われる。

トリスタン和音に始まり愛の死へ▶

「前奏曲と愛の死」はこの作品の始まりと終わり、すなわち第1幕への前奏曲と第3幕の終結部を組み合わせるもの。「前奏曲」の冒頭に鳴るのが「トリスタン和音」で、半音階を多用した音楽はゆるやかに高まっていく。「愛の死」ではトリスタンの臨終にかけつけたイゾルデが、死という永遠の夜の世界でひとつになる喜びを歌い上げる。なお、ワーグナー自身は「前奏曲と愛の死」ではなく「愛の死と変容」と呼ばれることを望んでいた。

[楽器編成]フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハープ、弦楽5部。

■ ビゼー：「カルメン組曲」第1番、第2番より

「しなやかに、上品に」▶

かの哲学者ニーチェは「ワーグナーの音楽は病んでいる」、「この音楽[カルメン]は完璧に思われる。それは軽やかに、しなやかに、上品に迫ってくる」と語った。オペラ史上に残る「カルメン」は、題材や音楽からスペインのイメージが強烈であるが、ジョルジュ・ビゼー(1838~75)によって作曲された、フランス・オペラの最高傑作のひとつである。

ドラマを盛り立てるキャラクター▶

両親ともに音楽家で、将来を嘱望されつつも36歳で生涯を閉じたビゼー。その最後のオペラとなったのが、1875年にパリのオペラ・コミック座で初演された「カルメン」だった。スペインのセビリヤを舞台に、奔放なロマの女性カルメンと、カルメンを愛し愛ゆえに殺してしまう竜騎兵伍長のドン・ホセ。原作のメリメの小説とは異なり、オペラには一途にホセを思い続けるミカエラが、また小説では端役であった闘牛士がホセの恋敵エスカミーリョとして登場し、物語を大いに盛り上げている。

2つの組曲からの5曲▶

初演こそ好評ではなかったものの、その後の「カルメン」の人気は言うまでもなく、オペラから選曲・編曲された組曲のかたちでも広く親しまれてきた。本日演奏されるのは以下の5曲である。

- ・前奏曲 第1幕への前奏曲の後半部分。「運命の動機」が悲劇的な結末を予告する。
- ・アラゴネーズ 第4幕への間奏曲。打楽器の効果的な使用とともにスペイン情緒にあふれている。
- ・間奏曲 第3幕への間奏曲。ハープを伴奏にフルートがのびやかに歌う。
- ・セギディーリャ 第1幕でカルメンが踊り歌いながらホセを誘惑する。
- ・ジブシーの踊り 第2幕のはじめ。酒場でカルメンは仲間女性たちと歌い踊る。

[楽器編成]フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、大太鼓、シンバル、タンバリン、トライアングル、ハープ、弦楽5部。